

令和元年度第 1 回利用者懇談会開催結果概要

- 1 日 時 令和元年 11 月 27 日（水） 10:00～11:30
- 2 会 場 埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）
- 3 出席委員 石川委員、石崎委員、井上委員、遠藤委員、杉山委員、
鈴木委員、高橋委員、高村委員、松岡委員、本橋委員
事務局 澁澤所長、瀬山コーディネータ、菅原副所長、飯塚副所長、
上木担当部長、丸山女性チャレンジ・女性就業相談担当課長、
井上管理担当課長
- 4 あいさつ 澁澤埼玉県男女共同参画推進センター所長
- 5 議 事
 - (1) 令和元年度事業の概要について 資料に基づき澁澤所長が説明
 - (2) 意見交換

【質疑・意見】

委員：

センターで行われる事業に参加する人の県内の居住地は、どのような所が多いのか。というのも、所沢や入間などの県西部から参加する場合、こちらのセンターに来るのに乗り換えが 2 回くらいで 1 時間程度掛かる。1 時間程で来ることができるので、あまり遠くはないが、埼玉県内の電車の多くが都心に向かっていていることもあって、何となく都心に人の目が向いてしまっている。そのため、参加しやすい地域とそうでない地域といった傾向があるのか。また、さいたま市在住の人が多いのか。

事務局：

傾向はやはりあると考えている。センターで講座を開催した際には、必ずアンケートを取っているが、居住市町村の欄を見ると、近いところからの参加者が多い。

全体のデータはないが、例えばひとつの講座を例として挙げると、さいたま市の方がやはり多い。県内の居住者が講座全体の参加者の 9 割近くを占め、1 割程の方が県外居住者であった。県内居住者の 3 分の 1 がさいたま市、残りの 3 分の 2 はさいたま市以外の市町村であった。

事業の概要を説明した際に、今年度の女性リーダー育成講座は定員 30 人と御紹介したが、県北の本庄市からの参加者が 3 人いた。本庄は遠いが、電車 1 本で来れるので電車の状況はやはり大きいと思う。西部方面の人は少し来づらいという委員の話があったが、参加者にとっては時間とお金が掛かることなので、電車が便利か否かの事情は講座への参加に影響していると考えている。

委員：

年代ごとの利用についてであるが、若い人にどのようにしてセンターを利用してもらうかということは、大きな課題だと思う。センターの女性リーダー育成講座に参加した人が今年はずごく若い方が増えたと言っていたが、それがどのような理由で増えたのか、何かアプローチの方法が違ったのかを知りたい。

講座に関して言えば、男女共同参画をもう少し自分たちの課題として捉えられるような、例えば、もう少し女性自身や自分の権利に係る内容であったり、性の問題だったりとか、若い方がこれだったら来てみようと感じるようなものをもう少し企画に入れてみたりすることも必要ではないか。

あとは、前回の懇談会の時も申し上げたが、そういった内容を交流コーナーあたりに少し工夫して広報してみるのもよいと思う。というのも、年代の上の人たちの集まりとか、勉強している若い人たちの姿しか普段見かけないので、何かあるといいなといつも思っている。

事務局：

若者のワールドカフェの時は、県内の高校に声掛けし、また、近くの高校は実際に電話してみたりした。土曜日の午後に設定したところ、最近、高校生は土曜日にも授業があり難しいという反応だった。また、今年は7月で、夏休みの時期だったため、補習があるので難しいとの答えもあった。高校生もかなり忙しいようで、若い人たちを呼ぶのも簡単ではないという印象を持った。ただ、学校にいくつか電話する中で、実際に来てもらうと、「いいことをやっていますね。また来年も来ます。」というような形で繋がっていくこともあるので、諦めずに声は掛けていきたいと考えている。

あと、交流スペースに勉強する学生が多いということであるが、今年はDV防止フォーラムのチラシを置いてみた。また、若者ワールドカフェとDV防止フォーラムの時は、3、4階にある自由に使える机の上に3つ折りにしてチラシを入れて置いたところ、誰が持って行ったのかは不明だが、チラシが減っていた。そのため、見てもらっていると感じている。

また、学生実習の学生や大学生などの若い人たちは、これからセンターを使ってもらいたい層になっているが、こういった人たちのアンケートを読むと、ライブラリーを知らなかったという人が大半であった。情報ライブラリーには課題学習等で使う資料が揃っていて非常に良かった、また来たいという御意見もあるので、少しずつではあるが、若い人たちに知ってもらえるようになってきていると思っている。しかし、委員のおっしゃるように、もう少し何かできることがあれば、考えていきたいと思っている。

委員：

実際に講座に参加した人の年代層の資料はあるのか。

事務局：

年代層のデータを取っている。講座にもよるが多いのは50代。性暴力防止セミナーの時は、30、40、50代が多い。

一般の参加者に関して、10代の人から申し込みしてもらうのはとてもハードルが

高いと思う。そのため、大学の先生からの推薦であるとか、授業に振り替えることで多く参加してもらえるよう工夫している。当センターでは学生実習に充てられるように講座を組んでいるので、1人で来ている若い人から、先生からの紹介で講座に参加しましたと言われることがある。

委員：

若者の参加ということに関して、今年7月20日のワールドカフェに私も学生とともに参加させていただいたが、高校生と大学生と女性リーダー育成の方たちがバランスよくグループワークしていたのが非常に魅力的であった。学生は1年生から参加させてもらったが、参加した学生のその後の成長を感じたので、是非またワールドカフェに参加させてもらいたい。学生の中でも記憶に残るセンターの講座が多いようで、大学全体で一番記憶に残った科目は何かと学生に聞いたところ、**With You** さいたまの科目が一番印象に残っているという学生がとても多い。生き方や考え方など、自分を見つめ直すきっかけに繋がる講座が多かったのかなと思う。個別で講座に申し込むことは学生や高校生には難しいと思うが、授業とかゼミなどと連携する形で講座の集客を進めて行くといいと思う。

あと、私はこれまでの講座にいろいろ参加させてもらったが、記録集みたいなものがあるとよいと思う。時間の経過とともにどうしても記憶が薄らいでいってしまうので、講演集や記録集があれば、大学で参加できなかった学生に配布して、授業で使ったりできるので大変いいと思う。少しお金が掛かる話ではあるが、そういった可能性も感じた。

委員：

今年度の事業の概要1ページの女性の貧困への取組の中にシングルマザーへの支援とあるが、これだと、シングルマザーだと貧困というイメージを植え付けてしまう感じがした。シングルマザーで活躍してる人もいるので、シングルマザーの支援を女性の貧困の中に入れずに別枠にした方がいいという感想を持った。

また、事業の概要の9ページに「男性に関する課題をテーマにした講演会」とある。これはセクハラのことによって男性が理解を進めるためという趣旨であると思う。確かに男性の方がセクハラする確率が高いとは思いますが、これについても、男性ならセクハラという印象を持たれてしまうのではないかと思った。

あと、労働局の統計によると、近年の労働相談の中で一番多いのがパワハラなので、来年以降パワハラが法律上、明記されるということもあり、こういったことも踏まえ、セクハラよりもパワハラをやった方がよいと感じた。

委員：

今の事柄に関連してであるが、確かにシングルマザーでも活躍していて特に経済的な問題を抱えていないという方も多くいると思うが、私は、大学で就学援助の学生支援をする中で、実際に窓口で担当する学生課の職員の話の伺うと、ひとり親の家庭、特に母子家庭の学生は増えてきている傾向にあるようである。

それから、奨学金の応募者の中でも母子世帯の応募はかなり多い。確かに世間の進

学率全体が上がってきており、母子世帯の家庭でも進学する人が増えてきている。そういった支援制度があれば利用したいという、ひとり親の家庭では特に深刻な理由によるものもある。そのため、大学で仕事をする中で、貧困のリスクはシングルマザーの所に一番しわ寄せがいてしまうのかなと感じるし、女性は貧困リスクが男性に比べるとやはり高いなと感じることがある。

委員：

私は地元で子供の貧困に関わっている。そこで、勉強会に出たりもしたが、ほとんどの人は貧困と言うと経済的貧困のことと思うようだが、貧困の中には経済的貧困の他にも繋がりや体験の貧困などがあると、子供の貧困問題の講師が言っていたのは大変印象に残っている。このように貧困はいろいろな意味を含むので、誤解を招かないように、経済的貧困や繋がりや体験の貧困というように明記した方がよいと思う。

委員：

少し話が戻るが、私はセンターに来るために2回乗り換えが必要である。そういった事情により、人によってはセンターに来るのが負担と感じることはあると思う。

先ほど、インターネット相談が増加しているとのことだったが、私たちのNPO団体が公募事業をセンターで実施した時には、ニュースレターとかSNSを使って参加者を募集した。そうしたところ、これらの発信を見て、さいたま市ならば交通の便がよいので行ってみようかと来てくれた人たちもいたので、SNSのようなものにセンターとしてももう少し力を入れてもよいのではと思った。というのも、若い人たちは全く抵抗なく簡単に申し込んでくれるので、そのようなちょっとした工夫が若者の参加のハードルを下げることにつながるのではないか。

委員：

「私たちは買われた」という企画展を実施した時には、10代や20代の若い人もかなり来てくれたが、その人たちの来たきっかけは半分がツイッターで、次がフェイスブックやHPを見てであった。また、センターの事業に多く参加している30代から50代くらいの人では、HPの他、新聞や知人の紹介といったものであった。

委員：

私たちの団体も同じような感じである。口コミが一番望ましいとは思いますが、確かにSNS経由で申し込みしてくる人もいる。

委員：

With You さいたまの現状では、SNSやツイッターの活用はどうなっているか。

事務局：

センター独自のものは持っていないが、埼玉県が行っているツイッターがあるので、県のツイッターにセンターが主催する事業を載せてもらっている。県庁のシステムに載せてもらうので、利用者がどこで見たかというアンケートを取ってくれと県から要請があった。そのため、センターで今まで取っていたアンケートに少し項目を増やし、県のSNSの項目を加えて、最近の分については集計を取っている。年代によっても異なり、SNSを見たという人もいるが、若い人たちの層でツイッターをやっている人

達に届くような仕組みは今はあまりできていない。

委員：

SNS に関してであるが、学生の話を見ると、どこかに旅行に行くにしてもガイドブックよりもまずはインスタで探すようである。インスタでよいと思ったので行ってみたという感じで、紙媒体を使わなくなった。すべてがスマホで完結するらしく、それも善し悪しだと思うが、スマホ 1 つあれば必要な情報を得ることができ、簡単に人とも繋がるようになってしまふ。だから、インスタ映えすることが今の女子学生には大事なことのようである。

委員：

ツイッターをやっている人なら、ハッシュタグを多く付けておけば、何かで引っかかる。例えば、男女共同参画とか何らかのキーワードを入れておけば、学生がレポートのネタ探しをしても、簡単に必要なものを見つけることができる。

委員：

私の団体では、さいたま市の教育委員会の後援をもらい、毎月、生涯学習課を通じてチラシを図書館と公民館に配布してもらっている。戸田市への配布は回覧板を使っている。これだと、若い人は読んでくれるかわからないが、一応は全戸に届く。

あと、私の団体は皆さんの活動を視点を変えた資金の面からサポートしているが、本日の委員さんには大学の方もおられるので、学生向けのセミナーのようなものを実施できたらいいと考えている。

以上の 2 つですね。半年でも先に会場を確保できればかなりありがたいということと、高校生、大学生のような若い人たち向けの金銭教育をお願いできればと思っている。

委員：

お金の問題というのは、小さい頃から、やりくりとか、自分のキャリアのこととともに考えられるとよいと思うが、なかなかそれが行き渡っていないのが実情かと思う。会場の確保の件も簡単ではなく、苦勞が多いかと思う。

委員：

配布資料の今年度の事業の概要の中に参加者の声が載っているかと思う。仕事準備カフェのチラシにも 1 つだけ参加者の声載っているが、事業の各パンフレットにも同じように参加者の声を載せてもらえれば、見た人がどの事業に参加しようか検討できるので、載せた方がよいのではないかと思う。

事務局：

仕事準備カフェのチラシにはスペースも多くあったので、御意見を載せることができた。紙面の編成も少し工夫して、今後、載せることを検討していきたい。

あと、委員からチラシ配布のことで話があったが、当センターの講座の広報紙は図書館便というものを使い、配布している。これは、さいたま市だけでなく県内の公立図書館をネットワークで繋ぎ、車で巡回するものであるが、この方法により、チラシを毎回、配布している。

しかし、例えば社会福祉士とかの団体が利用できるかというところ、図書館の協議会に入っている機関でないと難しいので、誰でも利用できるわけではない。

委員：

市民や県民の方が、どのような事業なのか知りたいと思った時に、その内容を容易に知ることができることが大切であると思う。

委員：

自分たちの団体は、NPOなので潤沢に資金があるわけではなく、助成金をもらっていても赤字である。このため、どうしても参加者に講演料の一部を負担してもらっているが、参加費を載せてしまうとチラシを配ってもらえないこともある。そのため、**With You** さいたまにもチラシの配布に協力してもらえると紹介してもらえると、私たちのようなNPO団体はとてありがたい。

委員：

事業の概要9ページに、来年の2月7日から9日に**With You** さいたまフェスティバルの開催が載っているが、今回のメインテーマがあれば、その内容を教えてほしい。何かテーマがあった方が、参加しやすいのではないかな。

事務局：

フェスティバルに向けて、実行委員会を設けて年ごとのテーマを確認している。近年は、つながる、広がる、未来をつくる、といったテーマで実施しているが、目玉と呼べるような年ごとのテーマは、実行委員会の中で決まっていないのが現状である。

委員：

11月に行われる県庁オープンデーには、私たちの団体も出店している。小学校なども休みになるので、親子でかなりの方が県庁には来ているが、センターの県民の日のイベントは、日程を意図的にだぶらせているのか。中身は違うのはわかるが、少しもったいない気がする。

事務局：

県民の日には、県庁で多くの出店があり、大規模に開催されている。県庁はとて敷地が広いので出店を見ながら移動するのが大変であるが、当センターは広くないので、全ての内容を回って見ることができる。

県民の日なので県庁と同じ日に行われているが、当センターとしては、若い世代の人たちにセンターを知ってもらうことを大きな目的としている。通常は、40、50代の女性の利用が多い中で、県民の日はもっと若い親子連れを対象としている。

当日の実施事業としては、去年はチェロコンサートを行ったが、今年はフルートアンサンブルのコンサートを初めて行った。県庁では、小さいお子さんが入れるようなコンサート会場はおそらくないと思うが、お子さんも入ることができるという点で、当センター独自の事業と考えている。

そのため、できるだけお子さん連れの方に多く来ていただくことで、20、30代といった若い人たちにセンターを周知することができ、センターのその後の講座に来てもらったり、お母さん方であれば、女性キャリアセンターの就業支援などにも繋げて

行くことができるものと考えている。

委員長：

他に何かあるか。それでは、以上で議事が終了したので事務局に進行をお返りする。

司会（事務局）

- ・ 本日の意見は今後のセンター運営の参考にさせていただきたい。
第2回目は3月の開催を予定している。
- ・ 以上で本日の懇談会を閉会させていただく。